

令和6年度 第1回京都市木の文化・森林政策推進本部会議（令和6年5月15日）

本部長（岡田副市長）指示

木の文化・森林政策推進本部の設置から3年が経ち、この間、従来の林業振興の延長線上ではない、全庁的な視点で各局区の施策を融合し、課題解決ユニット等で取り組んできた結果、着実に成果を積み上げ、今後に向けての土台もできてきたと考えている。

令和6年度から、国の森林環境税の課税が始まったこともあり、森林経営管理制度による森林整備をはじめ、森林を持続的に活かしていく各自治体の取組が、ますます注目されると考えている。

こういった状況を追い風と捉え、本部員の皆さんには、国や府の制度、財源が活用できる今、創意工夫を凝らし、「この機を逃せば、この先京都市の林業振興は立ち行かなくなる。」という危機感のもと、森林政策を強力に進めてほしい。

また、先般、松井市長からも「京都市の4分の3を占める森林をどう活かしていくかということは、市の命運にも関わることであり、ぜひ積極的にチャレンジしてほしい」との指示があったところである。

その上で、皆さんに2点お願いする。

1点目は、「積極果敢な挑戦」である。

これまで挑戦してこなかったことにも大胆にチャレンジをしてほしい。

木は植林してから木材として利用するまで、約半世紀もの年月を要し、なかなかすぐに成果が見えず、見通しを立てることが難しいといった側面があるが、今立っている木や森林をどう活かしていくかということは、今いる我々が考えられることである。ぜひそういった視点を持ち、失敗を恐れず、積極果敢にチャレンジし、突き抜ける森林政策を実現してほしい。

2点目は、「人材の育成」である。

これまで、森林政策を取り巻く課題ごとに、「課題解決ユニット」を組織し、部署の垣根を超えた取組を推進し、成果を上げてきた。幹部が全体を統括し取組を進めていくことは当然であるが、ぜひその「課題解決ユニット」に、若手職員のアイデアや発想を入れ、彼らが新たな面白いアイデアを実現したり、思う存分活躍できる環境を用意するなど、人材育成の視点も持って取り組んでもらいたい。

もちろんそういった挑戦の際には失敗する可能性もあるうえ、失敗に寛容さが無くなった今の世の中ではあるが、皆さんには、「チャレンジの末、失敗したなら仕方がない。面白かったじゃないか。」といった寛容さも持ち合わせながら、進めていただきたい。

最後に、毎年、推進本部会議でお伝えしていることであるが、どうせ仕事をするなら、楽しく、面白く、ということも忘れずをお願いしたい。